

非体験世代における昭和 30 年代の理想化と社会意識

○立正大学 浅岡隆裕
明治学院大学 青木久美子

1 目的

本報告は、2016 年、2017 年に引き続き、昭和年代（特に昭和 30 年代）が一般生活者において、どのように捉えられているのかを問題化している。昭和 30 年代を体験していない若年世代の中でも一定数みられる昭和 30 年代を理想化する（“見習うところがある”）意識について、他の社会意識との関わりから考察するものである。

2 方法

国勢調査に基づく実勢人数割合に近似させた調査対象パネルに対してインターネットを介したアンケート調査を実施した。調査期間は 2018 年 2 月であり、回収総数は 2,078 サンプル、そのうち、昭和 30 年代を直接体験していない世代である 20~40 代の回収サンプルは 1,036 であった。クロス集計や多変量解析、自由回答の分析を行う。

3 結果

昭和 30 年代を見習うべき対象とする人の割合は、非体験世代全体でも 46% 存在する。どのような人々が昭和 30 年代を見習うべきとしているのか。性別、最終学歴、階層、暮し向きといった属性では差異は見られない。“ものを粗末にしない”“自然環境に配慮する”“伝統を守る”“古いものを大切に使う”“ものの豊かさよりも心の豊かさが大事である”“仕事よりも家族との時間を大切にする”“夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである”“子育ては家庭ですべき”といった態度項目について共感する人々は、昭和 30 年代を理想化している。

また居住環境に関する項目では、近隣の人々とのつながりが濃く、伝統行事、子供会活動、町内会活動が盛んで、古い建物が残るまちに魅力を感じるという人が、昭和 30 年代を見習うべきとしている。昭和 30 年代に限らず、「過去の日本社会はよかったと思うことがあるか」については、非体験世代でも 5 割近くから支持されている。過去と言っても想起する時代は人によって異なると思われる。比較対象として近年メディアで言及されることが多い 1980 年代について見習うべきかどうかについても設問したところ、昭和 30 年代よりもやや低い結果となった。

それでは、「見習うところが多い」人々は、昭和 30 年代についてどのようなイメージを保持しているのだろうか。理想化している層では、活気がある、温かい、親しみを感じる割合が高く、理想化していない層では、暗い、貧しいイメージや特定のイメージがないといった結果であり、好対照をなしている。

見習うところが多い人々は、肯定的なイメージをどこから得ているのか。「見習うところが多い」層は、祖父母や父母から話を聞いたなど対人、生育環境を挙げる割合が高い。「ある程度見習うところがある」層では、テレビ番組や映画といった映像メディアを挙げる割合が高く、これらの影響がうかがえる。

4 結論

昭和 30 年代を理想化する意識については、もともと親和性が高いと思われる保守的、伝統的な価値感のみならず、私生活や環境への配慮を重視するといった態度の保持者からも共感されており、これらが結果的に非体験世代の一定割合の支持に結びついていると思われる。